

平成 30 年度 第 7 回未来創造セミナー

「植本祭の練習会～おすすめしたい本を持参してまちライブラリーを体験しよう！！～」

実績報告

1. 開催日時：  
平成 30 年 11 月 17 日(土) 10 時 30 分から 15 時 00 分  
(第 1 部:10 時 30 分から 12 時 00 分、第 2 部:13 時 30 分から 15 時 00 分)
2. テーマ：  
「植本祭の練習会～おすすめしたい本を持参してまちライブラリーを体験しよう！！～」
3. 話題提供者：  
磯井 純充 氏(まちライブラリー提唱者)  
  
司会進行  
伊藤 芳治 氏(立命館大学工学部4回生)
4. グループディスカッション  
まちライブラリーを実施するためには？
5. 開催場所:UDCBK
6. スケジュール  
10 時 30 分から 12 時 00 分  
話題提供 「みんなでつくる「まちライブラリー」」  
13 時 30 分から 15 時 00 分  
グループディスカッション
7. 参加人数: 9 名(第 1 部:9 名、第 2 部:6 名)
8. 報告  
～第 1 部～  
まちライブラリー提唱者の磯井氏にまちライブラリー誕生の経緯やまちライブラリーを展開している上で感じていること、全国各地のまちライブラリーの事例を紹介いただいた。
  - 森ビル(株)に入社し、非常にスケールの大きなビルが建設されていく中、まちに住んでい

る人がその展開についてきているのか疑問に思った。

- 都市計画家は目的に応じて建築を行うが、本当にその目的通りに使われているのか。人が集まっているのか。
- 我々の行動には必ずしも法則性があるとは限らない。個人の行動の法則性を個々に見る必要があり、その集まりこそが都市である。
- まちライブラリーも本があるから人が集まるということではなく、本を通じたコミュニティであると感じている。
- お互いの顔が見える関係性が大切である。
- 最近の図書館は、番号で呼び出しをされる。番号で呼ぶことはプライバシー保護の観点から必要性があるが、そのことでお互いを知るということをなくしてしまっている。
- 本日のセミナーが少人数であることの意味を考える必要がある。少人数だからこそ、自分から行動を起こすことが大切。なぜ、人が集まらないのかという問いかけが非常に大切であり、そのことをしないと前進しない。また、お互いの顔と名前が分かるというメリットもある。
- 「アカデミーヒルズ」を設立し、「まち塾@まちライブラリー」を提唱して自分なりのまちづくりを行っており、全国で多くの仲間ができた。
- 量を確保できたが、質が確保できなくなっているのではないかと分析している。つまり、量が増えれば人の顔や名前を覚えることができず、どうしても会員パスや数字等で形式的に管理するようになってしまう。
- 2010年に友廣裕一さんと出会い、目の前の人との繋がりがこそが人の関係性であると感じ、友成真一さんとの出会いで自分でも何かできるのではないかと背中を押してもらった。そこで、三つのことを学ぶ
  - 1) 個人でやれることだけをやる
  - 2) お互いの持てるものを出し合う
  - 3) 無理のない場所と時に小さくやる
- 本を通じて、人と出会うまちライブラリーのコンセプトを思いついた。
- まちライブラリーは本を寄贈し合い、読んだ本にはメッセージを書くが、メッセージを書くことは面倒であるし、人と繋がること自体が面倒であると感じる人もいる。しかし、そのことによって今まで出会うことのなかった人と出会える。
- まずは故郷大阪の実家の空きビルでまちライブラリーをスタートした。ただ単に本棚を設置しただけでは人は来ない。空間や環境があれば人が来るという簡単なものではなく、人との介在性があるからこそ集まるものである。
- 本棚ができて誰も来ない。うまくいかない。そんな連続の日々。そこで、人が集まるように食事ができる「本とバルの日」を始めた。
- 徐々に人が集まるようになり、規模も大きくなった。しかし、2016年10月に終了した。なぜかという、小規模であった当初は人の顔が見れて楽しいと感じる人がいたが、

SNS で集めたけっか知らない人が来るようになり、食事を作ってくれる人のモチベーションが下がったことと、開催の負荷が特定の人にかかってしまったのが原因。

- そこに、供給者と受給者のギャップが存在する。(まちライブラリーに例えると、本棚があれば人が集まるだろう。(供給者)しかし、実際は人が集まらない。(受給者))
- 建物の中に本棚を置くことによって、供給者は「人があつまるきっかけを提供している」と考えるが、受給者は「建物の中に入りづらい」と感じ、そこにギャップが生じる。そのギャップを解消するのが巣箱型まちライブラリーである。
- 巣箱型であれば外に設置することが可能であり、通りすがりの人でも気軽に本を読むことができる。特に子どもは純粋に本を読んでも良いと言われれば読むし、メッセージを書いてねと言われれば書いてくれる。このことで好循環が出来上がる。
- その後、全国各地の様々な形態のまちライブラリーの紹介。
  - カフェ、お寺、歯医者、病院、自然の中、公共図書館など。
  - 巣箱型まちライブラリーをスタートした Little Free Library。
  - 8 歳の子どもが運営しているまちライブラリーなど。
- 大阪府立大学が難波にサテライトキャンパスを作る際に、まちライブラリーの拠点として蔵書ゼロの図書館を開設。
  - 定期的に植本祭(本を寄贈したい人が本を紹介するワークショップを行い、終了後に本を寄贈するイベント)を開催。
  - 2 日の植本祭で48のワークショップを同時開催。大きなイベントを行うのではなく、小さなイベントを同時に、高頻度で行う。
  - 1 人のスタッフで、年間 250 回のイベントを開催し、5 年で蔵書ゼロが約 9,700 冊、会員数 1,500 人となる。
- 立命館大学大阪いばらきキャンパスでは、地域の人々の交流の場としてまちライブラリーを開設。
- もりのみやキューズモールでは、商業施設に地域コミュニティの場を作るためにまちライブラリーを開設。
- 直近の会員数は 4,713 名、年間累計入場者数は約 52 万人。来場者数の 4 分の 3 は閲覧・貸出者。集客のためにイベントを行っても、総数からすると割合は少なく、単発で終わってしまう。毎日来てもらえるように、日常的にできることをする。
- 本を借りに来るといことはまさしく日常であり、生活行動のパターンに当てはめるようにする。
- まちづくりは「日常」である。
- イベントをするときは、集客するのではなく「実行する人」を集める。
- 一つの空間で様々なことをしている集団を集める方が良い。一つの集団が大人数であると顔も名前も覚えられない。
- 人と一番繋がりがしやすい規模は 5 名程度。10 名でも多いくらいである。(120 分の集まり

に 10 名がそれぞれ全員と話す場合、1 回あたり約 2.7 分になる。)

- 参加者や利用者が繋がって場所を作っていくことが大切。
- 「私が何とかしなきゃ！」と思っている人にまちライブラリーの運営をお願いする。
- 生活している人は普段からまちのことを考えているのではなく、身近なことを乗り越えようとして初めてまちのことを考えるようになる。
- 面白がってやっている人が繋がれば、個人から集団になる。
- 資本力よりも、自分の力を信じて信念を持ってやっていく人が必要。



1. 講演をする磯井氏



2. 司会進行する伊藤氏

#### ～第 2 部～

参加者に持参していただいた本を自己紹介を兼ねて紹介していただいた。参加者は建築を学ぶ学生が大半であったが、紹介された本は小説や自叙伝など多ジャンルにわたった。その後、実際にまちライブラリーを運営するにはどのようにすれば良いか、何がポイントになるかを話し合い、磯井氏からのアドバイスを交えて議論した。

- 利用者はそのまちに住む人を想定する。
- サードプレイスとしての役割を担う。
- 利用者と運営者の差を設けない。
- 「自分が運営を手伝う」ではなく、「自分が運営する」という視点で考える。
- 自分が興味のある本からスタートすれば良い。(利用者受けを狙わなくても良い)
- どうすれば知ってもらえるか、立ち止まってもらえるかが大切。
- 学生はずっとそのまちに居るとは限らないので、地域の人と繋がっていかないと継続していかない。
- 個々が「何をしたいか」が明確になっている方が展開しやすい。そのためには、本当に

やりたいという強い信念が大切であり、そのことを発信していく。それでも協力者が現れなければ、自分で我が道を行けば良い。

- まずはやってみること。何かをしていれば、それに反応する人が現れて水平的に繋がっていく。上下の命令系統で実施するのではなく、水平的な繋がりが大切。
- 自分の世界観を作り上げる。
- 南草津では公共空間に設置することは難しいかもしれない。それであれば、住宅やマンションのロビーに設置できるかもしれない。(マンションライブラリー)
- 歯科医院、眼科医院に設置し、診察の待ち時間に本を読んでもらう。
- 本屋の前でマンガのまちライブラリーをする。
- 本を含む物々交換。
- まちライブラリーの本を持ち寄った読書会の実施。



3.グループディスカッションの様子



4.磯井氏と一緒に参加者と記念撮影

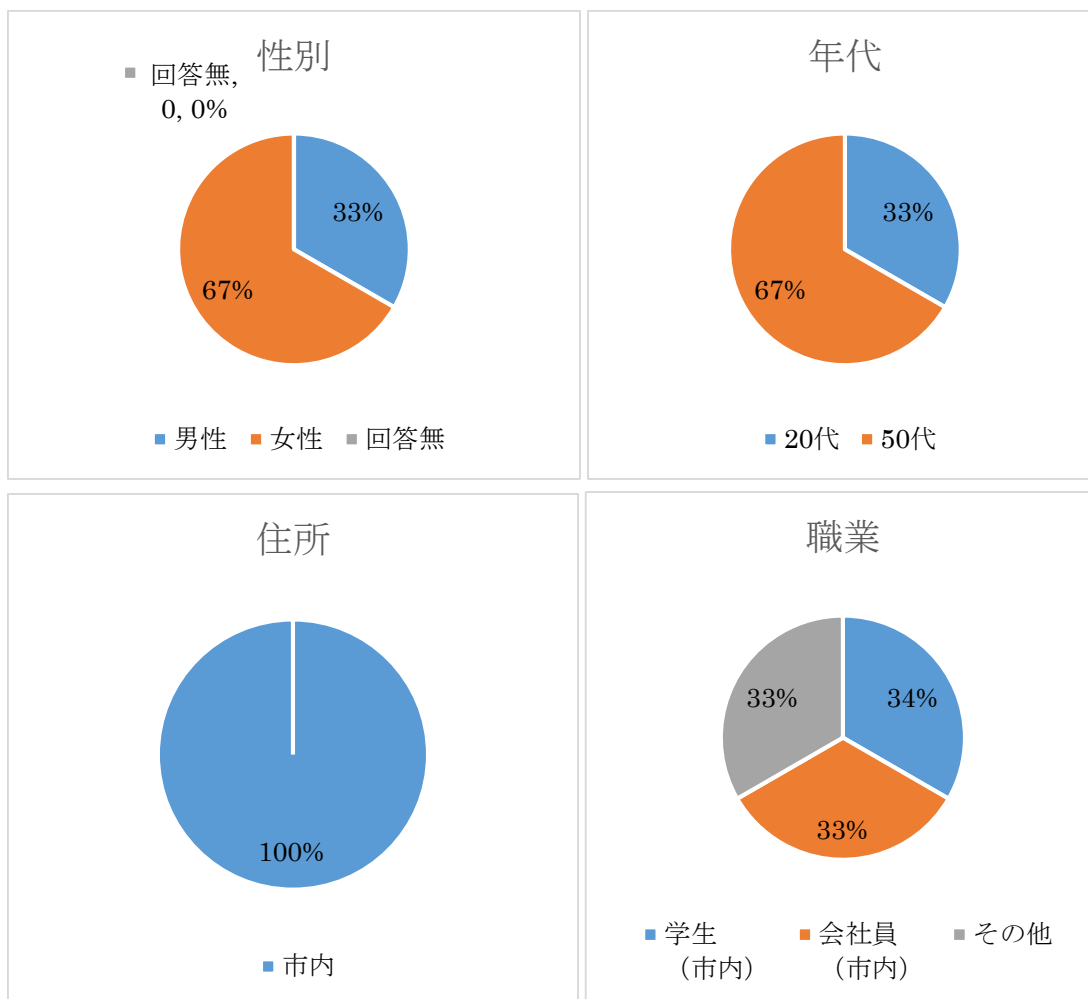
## 9. まとめ

UDCBKのコンセプトの一つに、「地域を知る、互いを知る」があります。まちライブラリーは本を媒介に今まで知り合うことになった人と繋がる可能性を秘めており、そのきっかけとして本を持ち寄ってみんなで本棚を作り上げる植本祭があります。この場での本はあくまでもツールであり、人と人とのコミュニケーションが水平的に繋がり、我が事としてまちライブラリーを運営していく人材が必要なことを磯井氏の講演およびワークショップでお話いただきました。また、日常こそがまちづくりであり、そこに集まる人こそがまちづくりの担い手であることから、まちライブラリーを運営していく人材の重要性がうかがえます。このようなセミナーを繰り返しながら、そこで知り合った人々が「新たな活動を創出」するために自発的にグループを形成し、各々が自主的にアイデアを一緒に考え、アイデア実現のために社会実験を行っていくことを目指しています。そのための産学公民連携のプラットフォームとしてUDCBKを御活用ください。

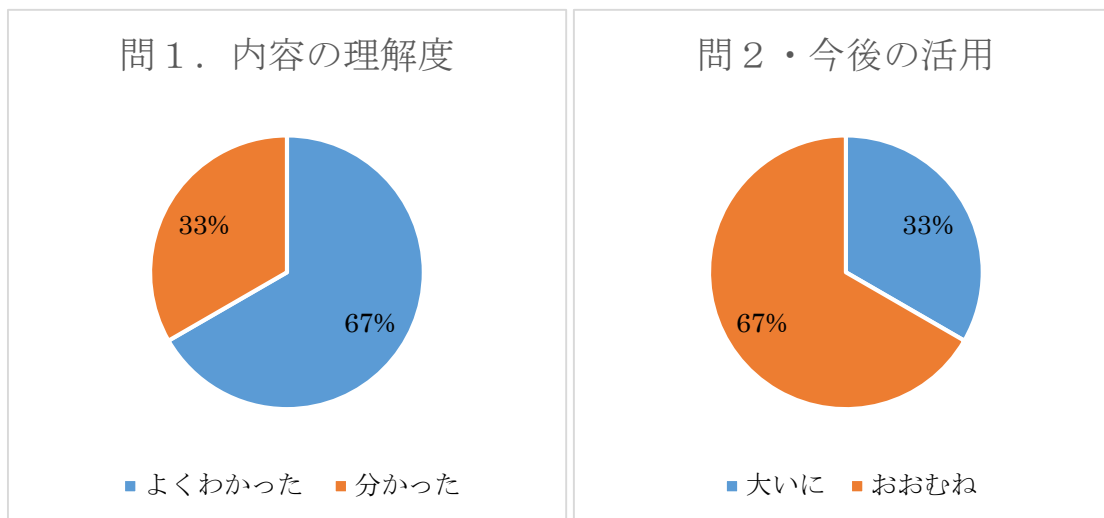
## 10. アンケート結果

参加者 9 名のうち、アンケートに回答していただいた方は 3 名でした。アンケート回答率は 33%です。

### (1) 参加者属性



(2) セミナーの内容について



(3) 内容に関する主な自由回答

- 住人に寄りそったまちづくりの具体的な事例を知りたい。まちづくりのリアルな現場に関心がある。
- 本が、学習ツールだけでなく、コミュニケーションツールだということ。
- まちライブラリーは以前から草津にあれば良いと思っていたので、ぜひ広がっていくと良いと思っています。
- 自分たちがいかに使う側に立って考えることができていないかを知ることができてよかった。
- ただの近所の主婦も参加していることをお忘れなく！

以上